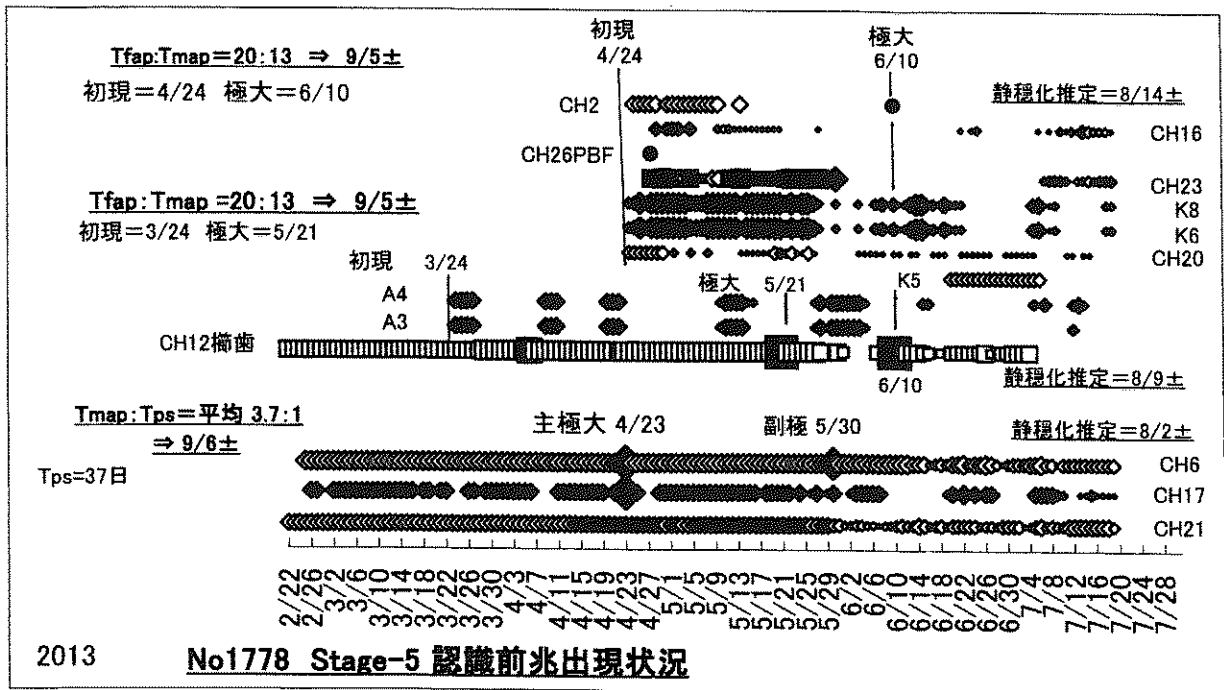


原稿校了後の前兆変化について

ハヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 近畿圏地殻大型地震の可能性推定前兆 続報

前兆継続→各前兆初現・極大関係再考察→9月5日±の可能性有



No.1778=前兆初現から丸5年以上となる長期継続特殊前兆の続報です。No.1778前兆は、近畿圏領域での地殻大型地震が示唆される地震前兆です。

現在までの第5ステージ前兆群の認識(複数前兆の出現開始時期、極大時期等の関係)解釈から、早い場合の可能性として8月上旬時期の可能性が考えられてきました。但し、この認識見解が正しい場合には、4/23極大に対して、7/11±時期に前兆終息が認められる筈で、該当観測装置はCH17でした。しかし、上図のとおり、CH17は確かに7/10までの顕著長時間の糸状特異はなくなりましたが、本日現在まで、日々10分~1時間程度の短時間ですが、糸状特異が継続しており、完全終息と云う認識は困難です。

また、前号観測情報まで記載しておりましたが、5/31±極大認識をしており、仮に8月上旬発生が正しい場合には、7/21±に全前兆が終息する可能性が計算されておりました。しかし、CH6-特異は再び基線電圧値も大きく変化し、±50mVではオーバースケールとなる状態の特異を記録しており、CH23も特異状態が継続するなど、あと2日程で全前兆が終息する様相には全く見えません。

これらのことから、現在の前兆関係の認識理解が正しくないことが明らかとなりました。そこで、再度上図の第5ステージ前兆群の前兆出現状況を検討しなおしました。

秋田観測点のA3 A4観測装置の特異状態が3/24から出現している点、ハヶ岳のCH2, CH23-BT, CH20の他、高知観測点のK6, K8特異等が4/24から出現しだしている点の、この2点は、前兆初現又は先行特異初現である可能性があります。

極大に関しては、5/21と6/10の二つに関して、今まではツインピーク型(お碗型)極大の可能性を考えて参りましたが、両

極大の中間時期に前兆が完全終息している点が不可解で、別々の極大である可能性と考え直しました。そう考え直しますと、3/24(A3, A4)初現~5/21極大=9/5±発生推定(Tppλ=8/9±) 4/24(CH2, K8)初現~6/10極大=9/5±発生推定(Tppλ=8/14±)と云う同一時期を示す関係が見えます。

更に上図下部のCH6, CH17等は、4/23と5/30を別々の極大認識しておりましたが、CH6には二つ極大があるのに対し、CH17にはひとつしか無い点が不可解でした。そこで、4/23を主極大、5/30を副極大(地殻地震特有の二次極大出現形態)として再認識し、主極大=4/23 副極大=5/30 主副極大間 Tps=37日 Tmap:Tps=平均 3.7:1経験則を使用しますと、前述の同様時期である、9/6±が計算されることが判りました。なお、この場合は、極大は主極大認識の4/23となり、CH6, CH17共に、仮に9/5±発生となる場合には、8/2±時期に静穏期(Tpp)に突入する計算となります。

以上のとおり、前号までの認識が正しく無いことが明らかとなり、再検討再認識の結果、前述(上図)のとおりの前兆関係が現状は考えやすく、この認識理解が正しい場合には、9月5日±が示される結果となりましたことをご報告させていただきます。また、この認識が正しいか否かは、前述(上図記載)の通り、4/23極大に対する前兆静穏化時期推定=8/2± 5/21極大に対する前兆静穏化時期推定=8/9± 6/10極大に対する前兆静穏化時期推定=8/14±が計算されますので、この時期に該前兆観測装置の基線が静穏化するか否かを確かめることで検証できます。状況は観測を続け、追って順次ご報告させていただきます。